心豊かでたくましく 共に生きる子ども

ひらかた

2月号

令和８年１月３０日
上尾市立平方小学校
校長　大野　和孝

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ 上尾市 平方小学校 検索 QR ｺｰﾄﾞ

～言葉のもつ力～

校長　大野　和孝

「鬼は外！福は内！」2月３日は節分の日です。節分とは「季節を分ける」という意味で、季節の変わる日のことを指します。本来は季節の変わり目である、二十四節気の立春・立夏・立秋・立冬の前日全てが節分になります。その中でも、春は新年の始まりでもあることから、「節分」と言えば春の節分を示すものになってきたそうです。

節分に豆まきをするのは、季節の変わり目に邪気が入りやすいとされていた当時、春を迎える前に邪気を払って幸福を呼ぶための宮中行事として行われたのが始まりだそうです。豆をまく理由については諸説ありますが、「豆（魔目）を鬼の目に当てて鬼を退治（魔滅）する」という説や、豆を「魔目（鬼の目）」に見立てて、炒ることで「鬼を射る」という語呂合わせからきている説もあります。「畑の肉」とされる食物としての大豆のエネルギーもさることながら、豆にまつわる言葉の力にも驚かされます。

さて、朝、私が校門に立っていると、多くの子たちが挨拶をしてくれます。笑顔で「おはようございます」と言ってくれる子、その場で挨拶と共に丁寧にお辞儀をしてくれる子、そばまで来てくれて、ハイタッチや握手をしてくれる子、挨拶の仕方は子供によって様々です。

「おはようございます。」の由来は、一説には歌舞伎の世界から広まったとされ、「お早いお着きでございます」、「お早くからご苦労様です」といった、早くから来て準備をしている役者さんへのねぎらいの言葉が省略されたものとされています。江戸時代には早起きが美徳とされ、朝早くから活動する人への感嘆や尊敬の気持ちを込めて使われ始めたとも言われています。また、「こんにちは」についても、「今日（こんにち）は、ご機嫌いかがですか？」というような言葉掛けが明治時代以降に省略され、徐々に「こんにちは」へと変化したとされているそうです。

挨拶は、今はマナーや礼儀として重んじられていますが、語源をたどると「相手のことを気遣う思いやり」から発生したと考えられ、時代を越えて共通の特徴があるとも言えそうです。実際、私が子供たちから受け取る挨拶においても、マナーや礼儀の域を超えた大きな効果が得られていると感じます。寒い中ではありますが、心が温まり励まされている気分にもなります。地域の方々からも同様な感想をいただくことがあります。挨拶には、心と心をつなぐ言葉の力があるような気がします。文化や言葉は違いますが、どの国にも挨拶が存在するのは、人は挨拶に言葉の力を感じていたからとも言えるのではないでしょうか。

私自身、「鬼は外！福は内！」と言葉のもつ力を借りながら、心の邪気（弱さ）と向き合い、今一度新年に立てた目標について少しでも近づけているか内省しようと思います。語呂合わせで、逃げてしまうと言われる2月です。全教職員、一日一日を丁寧に子供たちと共に過ごしてまいります。今後ともよろしくお願いいたします。